

# エスニック・トランスナショナル・ アクター再考(3・完)

——朝鮮族のアイデンティティ, コネクション, 民族ネットワーク——

宮 島 美 花

はじめに

I 新たな跨境生活圏の形成—朝鮮族の移動・活動と社会変化—

(以上 前々号)

II 伝統的な中朝跨境生活圏の今日—朝鮮族の脱北者への関与から—

(以上 前号)

III 朝鮮族のアイデンティティ, コネクション, 民族ネットワーク

3.1 アイデンティティ

3.1.1 ダブル/デュアル・アイデンティティ

—「中国」の「朝鮮族」という二つの自覚—

3.1.2 ネイションへ向かうアイデンティティの新たな意味あい

3.2 コネクション, ネットワーク

3.2.1 朝鮮族の事例から試みるコネクション, 民族ネットワーク説明

3.2.2 様々な「意思」

3.2.3 コネクションを利用しないトランスナショナルな移動・活動

むすびにかえて

III 朝鮮族のアイデンティティ, コネクション, 民族ネット  
トワーク

## 3.1 アイデンティティ

社会科学においてアイデンティティ概念が注目を集めるようになって久しい。ブルベイカーとクーパーの表現によると、社会科学における「アイデンティティ」概念は、使われすぎて結果として価値を失いつつあるという危機(a crisis

of overproduction and consequent devaluation of meaning) に瀕してさえいる。<sup>(1)</sup>ブルベイカーとクーパーによるこの論文は、芝崎が評したように、現在の「アカデミズムにおいて錦の御旗として機能しがち」なアイデンティティに「正面から挑戦」しており、筆者を含め、アイデンティティが「現在マジックワード的に氾濫しているきらい」<sup>(2)</sup>があると感じている少なくない研究者の関心を引いている。

ブルベイカーとクーパーの表現によると、アイデンティティとは、「実践カテゴリー (categories of practice)」の概念でもあり「分析カテゴリー (categories of analysis)」の概念でもある。前者は社会的アクターによって日常生活の社会経験から生み出されるものであり、後者はそうした経験から距離を置いた分析者によって使用されるものであって、両者を区別する必要がある、ブルベイカーとクーパーは、そのためにアイデンティティ以外のオルタナティブな別の概念を使用して議論することを提案している。また、アイデンティティの理解には、①普遍的な静態と見なす理解と、②常に変動し浮遊する動態として見なす理解があるが、ブルベイカーとクーパーによると、それほど不安定で一定しないものならばなぜ①的な意味で使われてきた「アイデンティティ」という言葉で②を表現するべきなのか疑問であり、また②を「分析概念」として使用する場合の有効性も不明確である。

確かに、実践概念としてのアイデンティティと、分析概念としてのアイデンティティとを区別する必要があるという指摘は多くの示唆に富んでいる。  
クォン・ヒャンスク 権香淑は、その指摘に示唆を得て、朝鮮族の事例においても「実践概念としてのアイデンティティに対しては、『アイデンティティが何 (what) であるのか』という民俗的な問いが設定されて然るべきであり、分析概念としてのアイデンティティについては、『アイデンティティがどのような (how) に変化してきたのか』という同一化 (indentification) のプロセスに対する問いが選定され

(1) Rogers Brubaker and Frederick Cooper, "Beyond 'identity'", *Theory and Society* 29-1 (2000), pp. 1-47.

(2) 芝崎厚士「論文評『アイデンティティ』を超えて—分析概念としての飽和—」『国際問題』496号, 2001年7月号, 92-94頁。

る必要」がある<sup>(3)</sup>と主張する。

一方、ブルベーカーとクーパーの提案を受け入れて、実践概念としてのアイデンティティと、分析概念としてのアイデンティティとを区別するために、アイデンティティ以外の概念を用いようと試みた研究を見つけることは容易ではない。筆者の見るところ、現時点では、アイデンティティを実践概念でもあり、分析概念でもあるとして使用する研究が主流であって、また、アイデンティティを常に変動し浮遊する動態と見なし、観察し分析しようとする研究が多くの注目を集めている<sup>(4)</sup>。

中国朝鮮族（以下、朝鮮族と略す）のもつアイデンティティを、常に変動し浮遊する動態として把握しようとしてみると、マルチプルなアイデンティティとしての中国朝鮮族アイデンティティは、今日、ますます多様な下位アイデンティティによって構成されるようになってきていることに気づく。柑本によると、「マルチプル」と「複合的」の用語の使い分けは以下の通りである。マルチプル・アイデンティティとは、「アイデンティティがマルチプルである形態」を指し、複合アイデンティティとは、分析上必要とされる「下位アイデンティティ同士を複合したもの」<sup>(5)</sup>である。これまで、朝鮮族のアイデンティティについては、「『中国』の『朝鮮族』という二つの自覚が入れ子的な構造を持っている」<sup>(6)</sup>という説明がなされてきた。筆者もまた98年拙稿以来、<sup>(7)</sup>朝鮮族を、民族的アイデンティティと中国公民としてのアイデンティティという二つのアイデンティティを持つ存在と指摘してきた。しかし、その後10年

(3) 権香淑「東北アジアの中の〈朝鮮族〉—移動、呼称、同一化の動態—」中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動とネットワーク』アジア経済文化研究所、2006年、325-326頁。

(4) 「浮遊するアイデンティティ」に注目した論考としては、例えば多賀秀敏「国際社会における社会単位の深層」多賀秀敏編『国際社会の変容と行為体』成文堂、1999年。

(5) 柑本英雄「マルチプルアイデンティティ序説：集団の社会アイデンティティに関する再検討」『ソシオ・サイエンス』第5号、1999年、128頁。

(6) 佐々木衛・方鎮珠編『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』東方書店、2001年、313頁。

(7) 宮島美花「東アジアのエスニック・トランスナショナル・アクター—華人と朝鮮民族のトランスナショナルな活動に注目して—」『国際政治』119号、1998年。

間で、彼らのトランスナショナルな活動はますます活発化し、彼らのアイデンティティは、単に民族的なアイデンティティと中国公民としてのサブナショナルなアイデンティティの強弱の組み合わせ<sup>(8)</sup>だけでは論じ得ないものとなっている。今日、朝鮮族個々人のアイデンティティについては、おそらく、朝鮮族の（人）数と同数の、質的にも多様で、その程度も様々なアイデンティティの組み合わせがあろう。そこでは、朝鮮族がネーションへ向けるアイデンティティが、今日、新たな意味あいをもって維持されていることにも注意を払う必要がある。

### 3.1.1 ダブル/デュアル・アイデンティティー「中国」の「朝鮮族」という二つの自覚

筆者を含め、多くの先行研究が指摘してきたように、朝鮮族が、新中国の建国以来、民族的アイデンティティと中国公民としてのアイデンティティとを育んできたことは疑いをいれない。

朝鮮族が中国公民としての性質を強めた歴史的背景として、①延辺朝鮮族自治州の成立前史における比較的穏やかで安定した朝漢の伝統的民族関係——いくばくかの民族間対立は先鋭化・激化に至らなかった——、②抗日共闘で共有された経験、③延辺朝鮮族自治州の成立過程において、彼らが単に上級機関（吉林省、北京中央）の指示を受容したのみならず、朝鮮族内部の意見対立を調整しながら自治区域の獲得に向けて主体的に関与したこと、④制約の多い中国の民族区域自治制度のなかにあつて、延辺は一貫して上級機関と良好な関係を維持しながら交渉を展開し、自身の要求の実現のため漸次譲歩を引き出してきたこと、などが挙げられる。そして、今日も、制約の多い中国の民族区域自治制度のなかにあつて、自身の要求の実現のため漸次譲歩を引き出す試行錯誤<sup>(9)</sup>の途上にある、と言える。

(8) 彼らのアイデンティティを、エスニック・アイデンティティとサブナショナルなアイデンティティの強弱の組み合わせから論じたものに筆者の学会発表がある。宮島美花「北東アジアのコリアン・ネットワーク—方法論としてのアイデンティティとネットワークについて—」環日本海学会第7回大会（於：富山県民会館）、2001年11月。

自らも朝鮮族出身の研究者である方秀玉<sup>パン・スオク</sup>によると、韓国との接触が急増した92年以降、朝鮮族は、韓国人との間に「言語上の微妙な差異、思考方式の大きな差異、経済取引方式の差異」があることを知り——これらは北朝鮮との長きにわたる交流のなかでは感じる必要のなかった差異である——、さまざまな葛藤を経験する中で、自らが朝鮮民族の一員であると同時に中国公民の一員であることを改めて強く自覚した、と述べる<sup>(10)</sup>。朝鮮族の民族的アイデンティティを強化させた韓国との交流は、彼らの中国へ向かうアイデンティティを弱体化させはしなかった。しかし、今日、中国へ向かうアイデンティティは、かつてのネーションに向かうアイデンティティとは意味的に質的に異なっていることを考慮しなくてはならないであろう。

### 3.1.2 ネーションへ向かうアイデンティティの新たな意味あい

本稿第I節で見たとおり、朝鮮族の今日の活発な移動・活動の原動力のひとつは「物質的な豊かさという意味での成功を求める人々の渴望<sup>(11)</sup>」である。いみじくも方が言及していたように、朝鮮族に、自らの中国へ向かうアイデンティティを改めて再確認させた契機は、「言語上の微妙な差異、思考方式の大きな差異、経済取引方式の差異」といった、同じ民族であっても長い年月を経て文化的に異質な他者同士となっていた朝鮮族と韓国人との間の異文化間接触と、それによる衝撃や摩擦であった。

ヒトの国際移動をテーマに取り上げる先行研究は、国際移動時代にあって、ナショナリズムは変質してきていると論じる。平野によると、今日の国際移動

(9) 以下の拙稿を参照されたい。「延辺朝鮮族自治州における民族区域自治の制度と実情(上)(下)」(『アジア・アフリカ研究』369号-370号, 2003年7月-10月, 52-75頁(上); 30-60頁(下))。

(10) 方の研究を紹介するものに以下の拙稿がある。「延辺朝鮮族研究者の統一研究—方秀玉『南北朝鮮関係の展開と在中同胞の役割』, 方秀玉『中国朝鮮族との協力関係と南北統一』を中心に—」(『社会科学研究科紀要別冊』第7号, 早稲田大学大学院社会科学研究科, 2001年3月)。

(11) 宮島美花「エスニック・トランスナショナル・アクター再考(1)—朝鮮族の新たな跨境生活圏—」(『香川大学経済論叢』第80巻第2号, 2007年, 129頁)。

によって、「入ってきた人々とそれを受け入れる人々の双方に」、近代のナショナリズムとは異なる「ナショナリズム的な状況が生まれ」ている。それは、文化的に異質な他者との文化接触によって引き起こされており、領土的な目的を伴っていた近代におけるナショナリズムとは異なる「新しいナショナリズム」とでも呼べるようなものである。<sup>(12)</sup> 多賀もまた、国際社会における行為体の質的多様化、量的増加により、アイデンティティを「民族や国家や領土に閉じこめて」おけなくなってきたとしているとして、「アイデンティティの領土からの解放」を論じていた。<sup>(13)</sup>

平野の指摘は、異なる文脈における議論ではあるが、今日の朝鮮族のアイデンティティを考える上でも大きな示唆を与えるものである。平野の指摘に示唆を得て、朝鮮族がネーションへ向けるアイデンティティの意味的变化を検討してみたい。制約の多い中国の民族区域自治制度のなかにあつて、朝鮮族によって吐露される不満の類は——例えば少数民族は現実問題として漢族中心で構成される中国の主流社会に参入しにくいなど<sup>(14)</sup>——、確かに看過し得ないものである。しかし、筆者も参加した日本在住の朝鮮族 120 人への共同調査（2001年）<sup>(15)</sup>、及び、この調査との比較も念頭に置いて実施された権による 164 人への後続調査（05年）<sup>(16)</sup>における、彼らの移動動機を見ても、中国の有り様に対する政治的な不満を直接の契機・動機として挙げた人々の割合は多くない。

(12) 平野健一郎「国際移動時代のナショナリズムと文化」『インターカルチュラル』（日本国際文化学会年報）4号，2006年，アカデミア出版，14頁。

(13) 多賀，前掲書，411頁。

(14) 朝鮮族へのインタビュー「マイノリティである在外コリアンが在住している国家と向き合った場合，主流社会に入りにくいという限界がある。」権香淑・宮島美花・谷川雄一郎・李東哲「在日本中国朝鮮族実態調査に関する報告」中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動とネットワーク』アジア経済文化研究所，2006年，197頁。筆者も個人的体験として，人民解放軍での勤務経歴を持つ朝鮮族を前にして，周囲の朝鮮族たちが，少数民族が軍に就職するのは容易ではないという理由をもってその経歴を高く評価するのを耳にしたことがある。

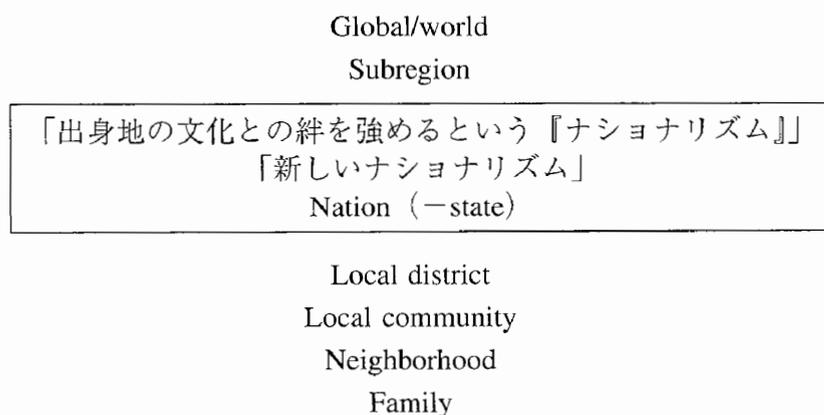
(15) 権香淑・宮島美花・谷川雄一郎・李東哲「在日本中国朝鮮族実態調査に関する報告」同上書。

(16) 権香淑「越境する〈朝鮮族〉の生活実態とエスニック・ネットワークー日本の居住者を中心にー」社会安全研究財団内「外国人問題研究会」（代表 田嶋淳子）編『韓国系ニューカマーズからみた日本社会の諸問題』社会安全研究財団，平成18年。

更に、今日、現れはじめているのが、中国は今後も経済的な成長を維持し、国際社会で存在感を強めるであろうと予測した上で、その「中国」の「朝鮮族」であることは自身の強みである、中国国籍は手放さずに持っていたほうが有利である、という個々人の利害と合致した今日の国際移動者の「新しいナショナリズム感覚」である。また、移動先での生活や頻繁な国際移動の便宜のため、中国国籍から国籍を変更する者が現れてきているが、韓国や日本などの国籍を取得してなお、中国との文化的なつながり、出身地としての中国とのつながりを決して手放そうとしない者たちが存在し、「出身地の文化との絆を強めるといふ『ナショナリズム』<sup>(17)</sup>」<sup>(18)</sup>が見られる。

筆者は、今日、朝鮮族のアイデンティティが向かう先としての「ネーション」は従来の意味よりも広がりを持つようになってきているのではないかと考える。図表1は、多賀によるアイデンティティ対象の空間的整理のなかの「ネーション」に、筆者が、個々人の利害と合致した国際移動者の「新しいナショナリズム感覚」、<sup>(19)</sup>「出身地の文化との絆を強めるといふ『ナショナリズム』」を含

図表1 アイデンティティ対象の空間的整理<sup>(19)</sup>



(17) 「新しいナショナリズム感覚」(14頁)「出身地の文化との絆を強めるといふ『ナショナリズム』」(14頁)という表現もまた平野の前掲論文によるものである。

(18) 朝鮮族へのインタビュー「これからの時代、最大のビジネス・チャンスは中国にあると思うので、中国国籍を持っていたほうが便利だろうと思いますが、状況によっては他の国の国籍や永住権・市民権を取得するかもしれません。その場合でも、心はあくまでも生まれ育った中国にあります。」権香淑・宮島美花・谷川雄一郎・李東哲「在日本中国朝鮮族実態調査に関する報告」前掲書、217頁。

めて記したものである。ただし、次の世代へ「出身地の文化との絆」が継承されるかは現時点では未知数である。日本在住の朝鮮族家庭の子どもたちが、中国語、民族語（朝鮮語）の順に喪失していつている例は少なくない。

アイデンティティ対象の空間的整理で最下位に位置づけられた「ファミリー」とは、エスニック・アイデンティティを含む「emotional identity すなわち血に対するアイデンティティ<sup>(20)</sup>」を育む最小空間あるいは核となる空間である。現時点では、多くの場合、朝鮮族がアイデンティティを寄せる空間は「ファミリー」から「ネーション」までの範疇にある。朝鮮族の多くは、意味的に変質しつつある「ネーション」までのアイデンティティを持ちつつ、とりわけ東北アジア地域においてトランスナショナルな活動を展開し、結果として朝鮮族はリージョナル・アクターとしての存在感を放つに至っているのではなかろうか。

筆者は、個人的には、朝鮮族のアイデンティティを、「ネーション」からより広い空間であるアジアへ、地球へと解放すべきである、という主張を持つ日本在住の朝鮮族を知っている。前述のとおり、アイデンティティは実践概念でもあり、分析概念でもある。実践者にとってはアイデンティティとは、What is our identity? という問いが設定されるが、分析者にとってアイデンティティとは How is their identity? という問いの解明に力点が置かれるものである。今日、実践者としての日本在住の朝鮮族の中には、朝鮮族のアイデンティティを「ネーション」からより広い空間であるアジアへ、地球へと解放しよう、という意見・運動が見られるようになってきている。そのような意見や運動はなぜ出てきたのであろうか。分析者には how そして why の解明が求められている。ひとつの映画が筆者にその解明のヒントを与えてくれている。2005年中韓合作映画の邦題『キムチを売る女』（原題『芒種』、監督：チャン・リュル）であ

(19) 多賀によるアイデンティティ対象の空間的整理のなかの「ネーション」に、筆者が、個々人の利害と合致した国際移動者の「新しいナショナリズム感覚」、「出身地の文化との絆を強めるという『ナショナリズム』」を含めて記したものである。多賀、前掲書、412頁。

(20) 多賀、前掲書、412頁。

る。周知の通り、今日、朝鮮族の日常生活は物質的に飛躍的に豊かになった。しかし、主人公のスンヒの夫は、カネをめぐるトラブルで殺人を犯してしまう。スンヒは、故郷を離れ、見知らぬ土地でキムチ売りで生活している。ほとんど朝鮮族がいない新天地で、スンヒは性的被害を含む様々な苦難を経験する。この映画では、スンヒが、朝鮮族であり、女性であり、といったあらゆる意味でマイノリティの象徴として描かれているように思う。多くの朝鮮族が移動先で活躍し「成功」を果たしている一方で、少なからぬ朝鮮族が苦難を甘受している。アジア人として、地球人として生きたい、という日本在住の朝鮮族の意見の背景に、彼らが甘受している、移動をすればするほど新天地で更なるマイノリティとなっていく状況、あるいは、多文化・多言語を身に付けた朝鮮族という存在が、今日の東北アジア地域における最も「都合のよい」マイノリティとして、結局、様々なマジョリティに利用され、消費されていってしまうのではないかという危機感等も勘案せねばならないであろう。

今後、従来よりも意味的に質的に広がりを持つようになってきている「ネーション」へ向かうアイデンティティの検討においては、韓国や日本などに在住し中国へ帰国する意思を持たない朝鮮族たちが、居住する「ネーション」にいかなるアイデンティティを向けているのか検討することも——そのようなアイデンティティが、あるのかないのかも含めて——、必要になってくるであろう。意味的に質的に広がりを持つようになってきている「ネーション」へ向かうアイデンティティが、アイデンティティの「ネーション」からの解放への道筋をつけるという可能性も皆無ではないと思われるからである。

### 3.2 コネクション、ネットワーク

1980年代以降、アジアの経済成長に華僑・華人が顕著な役割を果たしていることに注目する文脈から、民族的同質性を背景とした国境を越える紐帯についての数多くの著作が生み出されてきた。そのような紐帯は、ときには「コネクション」と表現され、ときには「ネットワーク」という言葉で表現されてきた。<sup>(21)</sup> 既存の華人研究では、そのような紐帯についての詳細な実態調査に力点が

置かれ、「コネクション」「ネットワーク」それぞれ自体の定義や、両者の関係を含む定義はなされてはこなかった。陳が、華人研究としておそらく初めて明示したように、華僑・華人ネットワークに関する先行研究は、定義付けを行わずにネットワークという用語を使用してきた。そのため、「華僑・華人という同じ対象を扱い、同じネットワークという語を用いていても、それぞれ論じられていることは同じではない<sup>(22)</sup>」。コネクションという言葉は、近年、「公正／平等に欠ける」という否定的なイメージが持たれているため、コネクションをネットワークに置き換えて使用しているに過ぎない、すなわち二つの言葉が意味するところに相違はない、という意見を、筆者はしばしば耳にしてきた。また同時に、筆者は、コネクションとネットワークは内容的には同義／同意味ではあるが、言葉／用語には時代ごとに流行（時代によって選好されるものと忌避されるもの）があり、ネットワークという用語が多様な学問領域で採用され、社会科学の分野でも注目を集め、盛んに使用されるに至り、コネクションによって替わった、という意見もしばしば耳にしてきた。しかし、筆者は、ここで、コネクションとネットワークに別の意味合いを付与することを試みてみたい。

### 3.2.1 朝鮮族の事例から試みるコネクション、民族ネットワーク説明

ここでは、ひとつの試みとして、エスニック・コネクションないし民族コネクションを、エスニック・トランスナショナル・アクターが日常生活の社会経験や歴史的経験から、必要のもとに生み出し、維持し、活用する実践概念と見なす。そして、エスニック・ネットワークないし民族ネットワークを、観察者・分析者によって使用される分析概念と見なす。そのうえで、今日、トランスナショナルな活動を活発に展開する朝鮮族のネットワークについて、コネクショ

(21) タイトルに「コネクション」という言葉を使用したものとして、例えば、樋泉克夫『華僑コネクション』（新潮新書、1993年）がある。「ネットワーク」という表現を使用するものに、渡辺利夫『華人経済ネットワーク』（実業之日本社、1994年）や、朱炎『華人ネットワークの秘密』（東洋経済新報社、1995年）などがある。

(22) 陳天璽『華人ディアスポラ－華商のネットワークとアイデンティティ』明石書店、2001年、38頁。

ンとの差異を意識しつつ、説明を試みてみたい。

近年、「ネットワークする」というように、ネットワークという言葉／用語を実践者が用いる実践概念として使用することが見られる<sup>(23)</sup>。上記のように、アイデンティティについては、実践概念でもあり、分析概念でもある、との意見が提出され、朝鮮族の事例を扱う研究者の間でもその区別が意識されるようになってきている。しかし、ネットワークについては、その区別は、アイデンティティの場合ほど意識されていないのではなかろうか。少なくとも、管見の限りでは、この区別に触れて朝鮮族ないし跨境民族の事例を扱う先行研究はない。筆者は、ここで、ひとつの試みとして、ひとまずコネクションを実践概念、ネットワークを分析概念とし、両者を区別しようと試みたい。これにより、国境を越えて活動する跨境民族の諸問題を検討する一助となれば、あるいは新たな議論・知見の契機となれば幸甚である。

アイデンティティは個人がそう思うだけでは単なる「思い込み」に過ぎない。個人のアイデンティティは、個人と自集団の関係（個人は、自身が所属すると考えるA集団において、A集団の構成メンバーたちからもメンバーと認められているか否か）、個人と他者・他集団の関係（個人は、A集団以外の他者・

(23) ウェーバー以来、集団論を展開してきた社会学は、官僚制などを例に「ヒエラルヒーを軸に組み立てられた機械的組織」を対象として、「決定論的な見方で線形的因果関係を同定する客観的科学が成立するという立場」を採ってきた。今日、「ヒエラルヒーを軸に組み立てられた機械的組織」とは対極に位置する「新しい組織化」の登場に直面し、「非決定論的な思考法で相互規定的因果関連を観察者の視覚を明示しつつ説明するという立場」が新興している。とりわけ「新しい組織化」を説明しようとする試みのひとつとして「ネットワーキング」概念を提出したリプナックとスタンプスによると、「ネットワーキング」とは、①成員資格を限定せず（参加したい者が自己責任で参加する）、②参加者は規定により動くのではなく自発的に動き、③それゆえその場その場のコミュニケーションによって一時的作業分担がなされ、④参加者の個性や差異が大事にされ、⑤集まる目的・意義がなくなるとすぐ解散する、という特質を持つ。「ネットワーキング」概念では、ネットワークは分析概念でもあり同時に実践概念でもあると見なされる。（君塚大学「組織からネットワークへー組織論のパラダイム革新」宮本孝二・森下信也・君塚大学編『組織とネットワークの社会学』新曜社、1994年、11-13頁。J.リプナック・J.スタンプス、社会開発統計研究所訳、正村公宏監修『ネットワーキングーヨコ型情報社会への潮流』プレジデント社、1984年。）ただし君塚によると、ネットワーキングは別の面から見れば、「持続性がなく脆弱で、非効率的で時間浪費的、とるべき責任があいまい」でもある。

他集団からも A 集団のメンバーと認められているか否か) によって意味を持つ。<sup>(24)</sup> 華人研究は、華人の持つ民族的アイデンティティのうち、集団に共有され、集団を集団たらしめ、自他認識の機能を持つようになった血縁・地縁・業縁などの各縁をコネクションと呼んできた。本稿では、このことを参考に、コネクションを次のように定義する。

コネクション：血縁・地縁・業縁・学縁など、民族集団の下位アイデンティティ・レベルで、「自」と「他」を見分けるシステムとして形成されてきた連携・集団化と、その維持のための人間関係。

日本在住の朝鮮族に対する共同調査(2001年)において、「来日経緯」の48%が「知人・友人・親戚の紹介」と回答しており、権による調査(2005年)では「来日前に親族と友人の両方又はどちらかが『いた』」との回答は全体の約8割に及ぶ。そして、「一番親しい友人」に関する回答は「朝鮮族」と答えた者が(共同調査2001年、権2005年ともに)82%であり、多くの聞き取り事例が、来日および日本での生活・人間関係が、親戚・同郷者(中国での出身地を同じくする朝鮮族)・民族学校(朝鮮族学校)時代の学友によって支えられていることを示している。聞き取りでは、自身の出身地以外の地方の出身者を排除した人間関係なども語られ、<sup>(25)</sup> この出身地に基づく自他認識のシステムは、同一の方言・生活様式を共有する華僑・華人の「地縁」とたがうところがない。

朝鮮族個々人が認知しているのは、所属する地縁、学縁といったコネクションの、ほんの一端に過ぎない。各コネクションの実践者である朝鮮族個々人は、知人の誰それは同郷者でもあり、同窓生でもある、といった各縁の重なりあい

(24) 大庭三枝「国際関係論におけるアイデンティティ」『国際政治』124号、2000年、147頁。

(25) 朝鮮族へのインタビュー「親しい友人は同郷(瀋陽)の朝鮮族のクラスメートです。日本語学校には延辺出身の朝鮮族もいるけれど、とくに親しくはないんです。延辺の言葉が聞き取りづらいので、彼らと話すときは中国語で話をするんですよ。」権香淑・宮島美花・谷川雄一郎・李東哲「在日本中国朝鮮族実態調査に関する報告」前掲書、205頁。

を含めて、所属する地縁、学縁といった各コネクションそれぞれが、いったいどれほどの広がりを持っているのか、その全体を鳥瞰し得ない。どれが、何が、各人にとって、その時々<sup>(26)</sup>の置かれた状況下で現実問題として実際に利用し得るコネクションかということと、そして、今後の必要時に役立つコネクションの拡大・拡充が、実践者の関心事であると考えれば、実践者は必ずしもコネクション全体を鳥瞰する必要性を持たない。それを検討するのは分析者の関心事となる。

それでは、分析者はそのような問いをどう検討すればよいのであろうか。近年、国際関係論においても盛んに議論されている「東アジア共同体」の現在を「ネットワーク解析」の視点から論じようとし、「中心」と「境界」の変容に着目した森川の報告が、多くの示唆を与えてくれている。森川は、ネットワークを「ある関係の下にある程度まで継続的に『連結』<sup>(26)</sup>されている諸単位の統一<sup>(27)</sup>体」と位置づけ、①関係、②時間軸（継続性）、③システムの3要素をネットワーク分析のための基本概念に据えた。政治、経済、社会／文化の各分野における国家間の関係性についてデータを集め、それらを比較的長い時間軸のなかで図表化し可視化したその著書では、複数の点が無数の線を結び、線の集合が面的な広がりを見せている。収集した時点ではデータは単なる数字であったはずである。それらを図表化し可視化したこの著書によって、読者は、そしておそらく政治、経済、社会／文化の各分野における国家間の関係性の実際の担い手たちも、東アジアに張り巡らされた多様なネットワークの姿を初めて確認したことであろう。朝鮮族の場合も、コネクションを利用したトランスナショナルな活動について、多くの事例を集めて実証的に検討して見たとき、複数の点

(26) 毛里和子・森川祐二編『東アジア共同体の構築第4巻 図説ネットワーク解析』岩波書店、2006年、viii頁。森川祐二「『東アジア・ネットワーク解析』—東アジア複合ネットワークへの接近」『早稲田大学21世紀COEプログラム「現代アジア学の創生」国際シンポジウム「現代アジア学の挑戦」配布資料』（2006年12月2-3日、於：早稲田大学）11頁。

(27) 「点と線の集合であるネットワークから東アジア地域の境界変動を把握するために、ネットワークとしての東アジアを、2つのサブシステム（コア）と、周辺（外部）で構成するシステムとして把握した。」毛里・森川編、同上書、x頁。

が無数の線を結び、線の集合が面的な広がりとなって浮かび上がってくるもの、それが彼らのネットワークと呼べるものではなかろうか。コネクションを用いた朝鮮族のトランスナショナルな活動を点から生まれた線、その集合を網の目状の面的な広がりとして研究者が見出したものをネットワーク、と考えたい。権は「エスニック・ネットワーク」を、「民族的な紐帯を背景としたヒト、モノ、カネ、情報、サービスなどが、国内外を問わず、様々な境界領域に跨って移動し、機能するプロセス又はその繋がり<sup>(28)</sup>」と定義する。ここでは、権の定義および、①関係、②時間軸（継続性）、③システムという3要素に注目した森川の手法に示唆を得て、分析者によって見出されたエスニック・トランスナショナル・アクターのネットワークを以下のように説明する。

①居住国の国民たる少数民族として生きる者、居住国での歴史的経験と永住権を持つ者、新たな国籍・永住権を取得したニューカマー、事業・留学・出稼ぎなど一時的海外居住者、担ぎ屋・風呂敷商売など日常的越境往来者、本国人との間で、国境の内外にわたって交流が展開されるとき、個々人の所有するもの——国籍・永住権等を含む権利、情報、資金、人脈、マンパワー（労働力、技術、語学力）など——をめぐって、国境の内外にわたって同民族同士の間で相互行為が発生しており、②朝鮮族の場合、第Ⅱ節でみたように、北朝鮮との間に新中国建国以前からの歴史的な跨境生活圏の存在し、その歴史的な跨境生活圏の維持と変容と同時進行で、92年中韓国交正常化以降、東北アジアの広範な範囲でトランスナショナルな活動を展開しており、東北アジアの広範な範囲に新たな跨境生活圏が形成されつつある、③民族ネットワークをシステムとして把握すると、在外コリアンがコアに、本国人が周辺に、或いは移動する人々がコアに、留まる人々が周辺に位置している。

「国境をこえた交流の増大と国家以外の多様な行為体の登場」に必要な条件

(28) 権香淑「越境する〈朝鮮族〉の生活実態とエスニック・ネットワーク—日本の居住者を中心に—」前掲書、209頁。

について言及した多賀の研究によると、行為体側の意思（したいか）の上に、必要条件として「物理的に可能ならしめる条件」が、十分条件として「制度的に可能ならしめる条件」とが必要である。国家が国境を越える活動を「制度的に可能ならしめる」条件には、「積極的条件〈そうしてほしいという要求〉」と「消極的条件〈国家はとめはしない〉」とがあり、国家は「規制をもってこの傾向を不可能ならしめる条件の低下」を選択することもできる<sup>(29)</sup>。

しかし、経済格差を背景に豊かさを渴望して移動するといったプッシュ要因、受け入れ国側の労働力不足といったプル要因、高速大量移送通信手段（インフラストラクチャ）、制度的許可／可能性、これらだけでは今日の朝鮮族の「過流動」を説明しきれない、というのが筆者の考えである<sup>(30)</sup>。延辺では、朝鮮族人口は流出によって減少し続けているというのに、漢族は、彼らも制度的許可／可能性を含めて国外へ、あるいは北京や上海といった大都市へ移動できる条件下にあるにもかかわらず、流出した朝鮮族の人口減少の隙間を埋めるがごとく、延辺における漢族は増え続けていっている。90年延辺における漢族人口は117万2,363人(56.65%)、朝鮮族人口は83万8,998人(40.54%)であったのに対し、05年では漢族129万2,732人(59.43%)、朝鮮族81万6,244人(37.53%)である。誰もが移動し得る時代にあって、朝鮮族の経験している国内外への「過流動」あるいはトランスナショナルな「過流動」という状況は、彼らの持つ民族ネットワークを無視しては検討し得ないのではないか。

### 3.2.2 様々な「意思」

移動・通信手段の大衆化は、新しい行為体にとって、「意思（したいか）」と道具（可能か）とが整えば、物理的可能性によって国境を越える活動が保障さ

(29) 多賀，前掲書，399-401頁。

(30) 筆者がこのような主張をまとめるに当たって、2006年12月10日、「EUサブリージョンと東アジア共同体」研究会第2回研究会（於：早稲田大学）における筆者の報告「エスニック・トランスナショナル・アクター再考—中国朝鮮族のトランスナショナルな活動に注目して」に対する多賀秀敏（早稲田大学）、柑本英雄（弘前大学）両氏の意見から多大な貢献を受けた。

れる」状況をもたらした<sup>(31)</sup>。朝鮮族の場合の「意思」の内容をいくつか整理しておきたい。

日本在住の朝鮮族への共同調査（2001年）（20代・30代が83%を占める）では来日動機を問う設問に対し「勉強・研究」が全回答の73%を占めた。就学生への聞き取りでは「高校卒業後、諸事情により大学等に進学しなかった者が、それまで日本語をある程度学んできたことから、なじみのある外国として日本行きを選択し、大学等への進学、日本語力の向上により、社会的上昇をはかろうと考えるケース」が、留学生への聞き取りでは「更なる社会的上昇を目指して、或いは、中国で手にしていた社会的地位以上に、より申し分のない学歴・地位・実力を持つ人材となることを目指して来日する場合」が、ひとつのパターンとして存在した<sup>(32)</sup>。権による調査（05年）（20代・30代が92%を占める）においても、「勉強・研究」が68.3%を占める<sup>(33)</sup>。第Ⅰ節の時点では、筆者は、今日の朝鮮族の国際移動・活動の原動力を、「基本的には物質的な豊かさという意味での成功を求める人々の渴望<sup>(34)</sup>」とした。共同調査（2001年）および権による調査（2005年）に協力した20代・30代の日本在住の朝鮮族に限っては、移動の意思は、その多くが「成功」への渴望を背景にしていたものと思われる。

しかし、第Ⅱ節では、北朝鮮の食糧難にあつて、「こちらが行くなり、来させるなりして<sup>(35)</sup>」北朝鮮の親戚を援助し続けている朝鮮族のケースも確認された。筆者は、このケースから、朝鮮族の国際移動・活動が今日も必ずしも「成功」という動機に限定されないと気付かされた。また本節（第Ⅲ節）では、日

(31) 多賀，前掲書，401頁。

(32) 権香淑・宮島美花・谷川雄一郎・李東哲「在日本中国朝鮮族実態調査に関する報告」前掲書，189-190頁。

(33) 権香淑「越境する〈朝鮮族〉の生活実態とエスニック・ネットワークー日本の居住者を中心にー」前掲書，219頁。

(34) 前掲，宮島美花「エスニック・トランスナショナル・アクター再考(1)ー朝鮮族の新たな跨境生活圏ー」129頁。

(35) 宮島美花「エスニック・トランスナショナル・アクター再考(2)ー伝統的な中朝跨境生活圏の今日ー」『香川大学経済論叢』第80巻第3号，2007年，186頁。

韓に居住する朝鮮族留学生が、経済的に困窮している故郷の朝鮮族児童へ奨学金を送る運動を展開するようになったことを後に紹介する。

更に、本稿第Ⅰ・Ⅱ節でも触れたように、極限的な状況下で駆り立てられた意思についても考慮しておく必要がある。第Ⅰ節では、韓国人男性と朝鮮族女性の国際結婚の増加に伴う問題として、かねてより韓国人男性が朝鮮族の家庭に支払う結納金に「売買婚」的意味が指摘されてきたこと、出国の手段として利用される国際結婚は、必ずしも朝鮮族女性の自由意思によるものと判断し得ないことについて言及した<sup>(36)</sup>。第Ⅱ節では、中国における脱北者妻（事実婚）の存在、および脱北者女性をめぐる人身売買の存在について、朝鮮族が、脱北者自身が選択した生き抜くための方便でもある、と考えていること、しかし、それを必ずしも脱北者女性の本意によるものと判断し得ないことについて言及した<sup>(37)</sup>。

### 3.2.3 コネクションを利用しないトランスナショナルな移動・活動

本稿冒頭の「はじめに」で触れたように、「エスニック・トランスナショナル・アクター」という用語をめぐるのは、民族的出自を同じくする者たちがエスニックな紐帯を持つが故にトランスナショナルに活動し得ているのか、それとも、トランスナショナルに活動する個々人たちが図らずも同民族であったのか、という問いが想起される<sup>(38)</sup>。従来、筆者は、エスニック・トランスナシヨナ

(36) 前掲、宮島美花「エスニック・トランスナショナル・アクター再考(1)－朝鮮族の新たな跨境生活圏－」125頁。また権は、03年現地調査時に、20歳の朝鮮族女性が「家族の生活が少しでも良くなるのであれば」という理由で韓国人との結婚を決めたと「泣きながら語った」と書いている。権香淑「越境する〈朝鮮族〉の生活実態とエスニック・ネットワーク－日本の居住者を中心に－」前掲書、248頁。

(37) 朝鮮族へのインタビュー「延辺で人身売買があるにはありますが、それは北朝鮮の人が自分を売ってくれ、と希望して売買が成立しているんです。」前掲、宮島美花「エスニック・トランスナショナル・アクター再考(2)－伝統的な中朝跨境生活圏の今日－」174頁。

(38) この問いは、2006年10月24日、早稲田大学COEプログラム「現代アジア学の創生」院生フォーラムにおける筆者の報告「東アジアにおけるトランスナショナルな民族ネットワークと活動に関する研究：中国朝鮮族の事例から」に対して、討論者の平野健一郎氏（早稲田大学）から提出された。

ル・アクターを「エスニックな紐帯を持つが故にトランスナショナル・アクターとして活動し得ている」と理解してきた。誰もが移動し得る時代にあつて、朝鮮族の経験している「過流動」という状況は、彼らの持つ民族ネットワークを無視しては検討し得ないと考えるからである。しかし、国境を越える活動を活発に展開する今日の朝鮮族の事例を注視してみると、「トランスナショナル・アクターとして活動する者たちが図らずも同民族であった」という新たな側面をも見出すことができる。

今日、コネクションを利用しない限り、トランスナショナルに活動し得ないわけではない。結婚紹介所を介してでも、ブローカーを通じてでも、コネクションによらずに国境を越えることが可能である。コネクションを用いた朝鮮族のトランスナショナルな活動を点から生まれた線、その集合を網の目状の面的な広がりとして研究者が認識したものをネットワーク、と考える。民族ネットワークの網の目が細かさを増しつつ面積を広げていくとき、コネクションによらずに国境を越えた者が、移動の後に自らが加入資格を持つ既存のコネクションへの参加も増加するであろう。例えばブローカーを通じて、コネクションによらずに国境を越えた者も、移動の後に自らが加入資格を持つ既存のコネクション（例えば同郷の朝鮮族との関係）への参加を開拓することが可能である。そのほか、新たなコネクションの創造とも言い得る既存のコネクションにはない新たな人間関係も加わっている。華人のコネクションの事例では、血縁・地縁・業縁の3縁が代表的であるが、研究者によっては政縁・学縁、あるいは神縁（宗教関係）・物縁（取り扱う商品関係）を入れて5縁、7縁とする場合<sup>(39)</sup>もあり、今日では伝統的な3縁以上に活用されているとの主張が見られる。日韓に居住する朝鮮族留学生の有志が、経済的に困窮している故郷の朝鮮族児童へ奨学金を送る運動（つぼみ会<sup>(40)</sup>）を展開するようになったが、このような朝鮮族同士の 이슈・オリエンティッドな活動とそのメンバーが、新たなコネク

(39) 游仲勳編著『21世紀の華僑・華人』ジャパン・タイムズ、2001年、30頁。

(40) 日韓に居住する朝鮮族留学生が、インターネット上のサイト「朝鮮族広場」(URL: <http://www.kcw21.com/html/>)を中心に2001年に設立した。

ションの創造に該当するであろう。「来日前に親族と友人の両方又はどちらかが『いた』」者が約8割であったのに対し、「来日前も現在も、いずれも友人がいない」と答えた者はわずか4.2%<sup>(41)</sup>（権,2005年調査）である。ただし、現時点では、東北アジアに広がる民族ネットワークの網の目の細かさにはバラつきがある。コネクションを用いて移動した者でさえ、移動先によっては限定的な生活空間の中で孤独に苛まれて日々を過ごす場合がある<sup>(42)</sup>。従って、移動先での環境によっては、結婚紹介所やブローカーを通じてコネクションによらずに国境を越えた者が、移動後に既存のコネクション、新たなコネクションへの参加を開拓することは可能ではあるが容易ではない。その理由としては、ひとつには、朝鮮民族は、「単に同姓であるからといって中国人が抱くような父系同族意識」を抱かず、同姓の者のうち先祖の根拠地を同じくする者だけが「同一父系血縁関係」と認識され同族とされる<sup>(43)</sup>、という朝鮮半島における伝統社会の人間関係についての社会人類学の立場からの説明が参考になる<sup>(44)</sup>。またひとつに

- 
- (41) 権香淑「越境する〈朝鮮族〉の生活実態とエスニック・ネットワークー日本の居住者を中心にー」前掲書、224頁。
- (42) 朝鮮族へのインタビュー調査「来日した時に大変だったことはなんといっても孤独です。先輩が留学している県にある私立大学に入ったので、同じ大学ではなかったことから…」権香淑・宮島美花・谷川雄一郎・李東哲「在日本中国朝鮮族実態調査に関する報告」前掲書、205頁。
- (43) ふつう同本同姓は組織化されていないので、名乗りあって初めてわかるが、「その時に示される族兄族弟としての親愛の情は、こうした広い親族組織を持たないわれわれ日本人には想像のつかないものである」。末成道男「親族」伊藤亜人編『もっと知りたい韓国1』第2版、弘文堂、平成9年、198頁。
- (44) 華人出身で華人研究を行う研究者の潘（パン）は次のように記している。「中国人移民のあいだで発展した最も驚くべき組織は、『同姓会』（同じ姓を持つ者の集まり）である。…中国人社会の調査のためにマニラに着いたわたしは、潜入の第一歩としてチャイナ・タウンへ行き、そこで漢字の看板によって『同姓会』があることを知った。ある同姓会に問い合わせると『潘（パン）氏の同姓会』があることが分かったのだ。『潘』は（英語圏の）『ピュー』や『ペイン』と同じようにありふれた姓である。つまるところは中国のあちこちから集まったにちがいない、南福建出身のマニラの『潘』氏とわたしが親類であるはずはないが、わたしがそこで同姓の者として歓迎されたことに変わりはなく、『同族』の宴会に招かれ、あらゆる援助をしてもらえた。」「的確に言えば、これは血縁組織というよりは、同姓クラブなのである。でも、事実上の血のつながりはなくても、血縁意識は存在した。」リン・パン（片岡和子訳）『華人の歴史』みすず書房、1995年、13-14、134-135頁。

は、歴史的に存在したコリアン・ネットワークと今日のコリアン・ネットワークの間の非連続性に言及した玄武岩<sup>ヒョン・ムアン</sup>の論稿が参考になる。玄によると、日本帝国主義への対抗ネットワークとしての民族ネットワークの場合——植民地下の朝鮮半島「本国」よりも帝国の外縁部（沿海州、満洲など）が主導した——，帝国の崩壊とともにその役目を終え消失し、冷戦は更にそのネットワークの跡形まで破壊したという<sup>(45)</sup>。

### むすびにかえて

最後に、本稿全体（第Ⅰ～Ⅲ節）を振り返り、浮かび上がる地域へのインパクトないし課題、そして筆者の今後の研究課題などについて言及し、むすびにかえたい。

第Ⅰ節では、98年拙稿以降の約10年間、急激な展開を呈してきた朝鮮族のトランスナショナルな活動を実証的に検討することを通じて、東北アジアにおける域内交流の現状、地域に生じた国内・国際的な社会変化や社会問題を確認しながら、今日の朝鮮族が東北アジアのかなり広範な範囲を自らの跨境生活圏としていると論じた。第Ⅱ節では、朝鮮族の脱北者への関与についての事例研究を行い、朝鮮族と北朝鮮の人々の間に、歴史的伝統的な跨境生活圏が維持されていることを確認すると同時に、そこに今日見られる変化や社会問題を確認した。第Ⅲ節では、第Ⅰ・Ⅱ節で行った実証研究を踏まえて、今日の朝鮮族のアイデンティティおよびネットワークについて検討を行った。また、コネクション、ネットワークの用語について、両者の違いを明らかにすることを意識しつつ、本稿なりの説明を試みた。

高速大量移送通信手段の発達によって、国境を越える移動・活動が、物理的に飛躍的に容易になったことは疑いを入れない。第Ⅰ節で、移動した朝鮮族子弟の養育等の問題を中国内の老親が担っている状況について見たように、延

(45) 玄武岩「東アジアのなかのコリアン・ネットワーク—その歴史的生成」『アジア新世紀3 アイデンティティ』岩波書店、2002年。

辺・ソウル間を2時間程度で結ぶ国際航空路が、朝鮮族の移動・活動と移動先における生活を支えている。このような朝鮮族の事例から明らかになることには、おそらく紐帯の距離感は喪失されていっている。国際移動時代という量的な問題と、国家は地球上を隙間なく埋め尽くし続けていると言えども、国内における紐帯のあり様と国境を越える紐帯のそれに差を見出しにくくなっているという質的な問題から、国境を越える／越えないということの意味合いの今日<sup>(46)</sup>的变化を検討する必要がある。

朝鮮族にとって紐帯の距離感が喪失されていっているということを背景に、誰が同胞か、どこまでが同胞かという問題において、中韓両国と朝鮮族の意見は、ますます齟齬をきたすようになってきている。韓国は在外同胞法（1999年）において、米国籍の在米コリアンも適用対象としながら、朝鮮族を適用外とした。韓国の憲法裁判所はこれを憲法違反とする判決を下し、法改正を求め朝鮮族のデモも見られたが、中国の李濱・駐韓大使は、次のように述べて法改正を牽制した。朝鮮族は中国の国籍を持つ中国の一員であり、韓国が在外同胞法を修正し朝鮮族を「在外同胞」として認定する場合には中韓関係——中国は二重国籍を認めない——をよく考慮すべき、と述べた<sup>(47)</sup>という。在外同胞法ができて自分たちは同胞としての権利から排除され、経済格差を背景に、より豊かな韓国へやってきた言葉が通じる便利な「外国人」として韓国社会の底辺を支える役割を担う、という位置づけに、少なくない朝鮮族がフラストレーションを感じている。これまで、経済格差を背景に経済的により豊かな国へとやってきた外国人は、そのようなフラストレーションを甘受するのが当然視されてきたように思う。第Ⅱ節で言及したように、ヒトの移動は利益とともに多くの不利益をもたらすが、多くの課題、特に人権、差別と言った課題に対処する政策を多国間で調整する制度的枠組みは、現在の東北アジアに存在しな

(46) これらの視点は、2006年12月10日、「EUサブリージョンと東アジア共同体」研究会第2回研究会（於：早稲田大学）における筆者の報告「エスニック・トランスナショナル・アクター再考—中国朝鮮族のトランスナショナルな活動に注目して」における質疑応答のなかで柑本英雄（弘前大学）氏から提出された。

(47) 「中『在外同胞法の処理を慎重に』」『朝鮮日報』ウェブ日本語版、2001年12月6日。

い。

朝鮮族の事例から、国境を越える／越えないということの意味合いの変化を検討しようとするとき、筆者は、朝鮮族の国境を越える活動に注目する既存の朝鮮族の研究に、「国境を越える」という意味で「トランスナショナル」という表現を使用するものと、「クロスボーダー」という表現を使用するというものの2種類があったことを思い起こす<sup>(48)</sup>。仮に「クロスボーダー」が、ボーダー（国境）を越える物理的な現象を表す言葉であるとする<sup>(49)</sup>と、それに対し「トランスナショナル」とは何を意味していると考え、両者をどう区別して考えればよいのだろうか。いまいちど70年代に登場した「トランスナショナル」という用語、あるいはトランスナショナル・リレーションズ研究の理論的インプリケーションを再検討し、再吟味する必要がある<sup>(49)</sup>であろう。70年代に登場した「トランスナショナル」という用語ないし概念をお払い箱にするのではなく、古い杯に新しい酒を注いでこそ、得られる新たな知見もあろう。比喩的になるが、本稿は、朝鮮族が物理的な意味で border（国境）を cross している（渡る／横切る）足跡を観察してきただけでなく、nation を trans している（越える／横切る）朝鮮族の生活やアイデンティティなどを観察してきたようにも思う<sup>(50)</sup>。「ネイション」という言葉に含蓄される意味合いが、近代のそれとは意味的に質的

(48) 「トランスナショナル」という表現を使用するものとして例えば前掲の98年拙稿（宮島美花「東アジアのエスニック・トランスナショナル・アクター—華人と朝鮮民族のトランスナショナルな活動に注目して—」）がある。「クロスボーダー」という表現を使用するものに、金永基『クロスボーダー移動と地域社会の再構築—中国朝鮮族の移住・適応・エスニック・アイデンティティの形成』富士ゼロックス基金編刊，2006年。

(49) 70年代以降のトランスナショナル・リレーションズ研究の軌跡を整理したものに以下の拙稿がある。宮島美花「トランスナショナル・リレーションズ研究の興隆、衰退、再生と展望」『ソシオ・サイエンス』第7号，早稲田大学社会科学部研究科，2001年。

(50) 筆者は、2007年2月9日、トヨタ財団主催「在華・在韓朝鮮族・在韓華僑研究報告会」（於：東京新宿三井ビル）において「トヨタ財団研究助成による現地調査結果報告—05年助成課題エスニック・トランスナショナル・アクター再考—中国朝鮮族の脱北者への関与を中心に—」を行い、ここで来場の多様な分野の多くの研究者と意見を交換する機会に恵まれた。筆者が、英語のネイティブ・スピーカーである研究者に cross border と trans border という表現の意味的相違や使い分けについて質問したところ、共に「（国境を）渡る／横切る／越える」という意味であって、意味的な差異はないが、貿易のように移動の前後地に影響が及ぶ場合は一般的に後者を使用する、との説明を受けた。

に変化を起こしつつあるということを含めて、理論的な検討を筆者の今後の研究課題としたい。